

文章の読解・記憶に及ぼす構えの役割

佐藤 公代

(教育心理学研究室)

(平成10年9月30日受理)

Role of the Attitude toward the Comprehension and Memory in Writing

Kimiyo SATOU

問題と目的

佐藤(1985・1990)の研究から、構えの意識化のさせ方によって、文章の理解度やとらえ方が違ってくることが明らかにされている。

今回は、大学生を対象に、認知スタイルの違いや国語の好き嫌いによって、文章を読むときの構えの与え方に効果の差があるかどうかを検討する。

仮説は次の通りである。

- ① V群(統制群) < IV群(採点群) < III群(理由群) < II群(書き込み群) < I群(書き込み理由群)の順に成績が高くなるだろう。
- ② 認知スタイルが「衝動-遅くて不正確」 < 「速くて正確-熟慮」の順に成績が良いであろう。
- ③ 国語が好きでない者には、じっくり読むように教示を与えることによって、成績を高めることができるであろう。

方 法

- 1) 実験期間：1997年5月15日～7月22日
- 2) 被験者：E大学1～3回生，131名。Table 1に被験者の人数の内訳を示す。
- 3) 実験材料：事前テストとして、「人[ヒト]に成る」(小原秀雄著，大月書店，1985) 事後テストとして、「児童心理学への招待」(小嶋秀夫著，サイエンス社，1991)，「大学生の心理」(関峯一，返田健編，有斐閣，1983)を使用する。
- 4) 手続き
事前テストとして、「ヒト[ヒト]に成る」の本の中から，適当と思われる箇所を抜き出し，

10点満点の問題を作成する。接続詞を当てはめる問題を5問、文章を段落分けする問題を1問、残りは指示語の内容や文章の内容に関する問題で、なるべく全体をよく読まないと把握しきれない問題にする。問題文として選ぶ部分は、その日の授業内容に関係のある部分にし、予習という形で取り組んでもらう。何も教示せずに自分の方法で解いてもらい、下記の5群に等質に分ける。

Table 1 被験者の人数の内訳 (人)

	速—正確	衝 動	熟 慮	遅—不正	合 計
I 群	13	32	26	21	92
II 群	17	26	17	6	66
III 群	16	31	47	17	111
IV 群	11	22	31	32	96
V 群	26	52	32	21	131

事後テストの4回までは、「児童心理学への招待」の本の中から、その日の授業内容に合った部分で、適当な箇所を抜き出し、10点満点のテストを作成する。その後の2回については、「大学生の心理」の本の中から、適当な部分を抜き出し、10点満点のテストを作成する。

構えの形成として、「本文への書き込み」と「解答を間違った部分の考察と次の目標点の設定」を行なう。

インストラクションは次の通りである。

本文への書き込み：「次の文章は、『○○○○』について書かれています。文章を読みながら浮かんできた、いろいろな疑問、考え、感想を、その浮かんだ文章に線を引き、そこに書き込んで下さい。関係づけがあったりするものは、線で結んで下さい。そのようにして読み進み、読み終わってから問題を解いて下さい。」

解答を間違った部分の考察と次の目標点の設定：「どの問題ができませんでしたか。できなかった問題番号のところに○をつけ、どうしてできなかったと思うか、理由を書いて、次の目標点を書いて下さい。」

最後に、国語の成績や読解についての意識アンケートを行なう。MFFT と NMFFT を使用し、独自の認知スタイルを測定する。ただし、個別実験は困難なので、一定時間内に一定量の図を与えて、その試行量と正答率から認知スタイルを測定する。

認知スタイル測定の教示は次の通りである。「まだページをめくらないで下さい。次のページから、いくつかのイラストを見ていただきます。(1)から(4)まであります。各問いに6問ずつの問題があり、それぞれ、上の段に1つ、下の段に6つのイラストがあります。下の段の6つの中から、上の段の絵と同じものと思われるものにまるを付けていって下さい。各問い40秒ずつ、160秒間続けていってまいります。40秒ごとに合図をしますので、問題の途中でも次に移って下さい。まるをつけた後、答えを訂正する場合は消しゴムで消さずに、バツをつけて正しい答えにまるをつけて下さい。合図があってからページをめくって下さい。」

5) 条件

I 群：書き込み理由群（「本文への書き込み」「解答を間違った部分の考察と次の目標点の設定」ともに行なう。）

II 群：書き込み群（「本文への書き込み」のみ行なう。）

III 群：理由群（「解答を間違った部分の考察と次の目標点の設定」のみ行なう。）

IV 群：採点群（解答をするだけ）

V 群：統制群（採点も行わず、ただテストをやるだけ）

6) 認知スタイルの分類

- 「速くて正確型」：試行量，正答率ともに平均値より上の者
- 「衝動型」：試行量は平均より上，正答率は平均値より下の者
- 「熟慮型」：試行量は平均より下，正答率は平均値より上の者
- 「遅くて不正確型」：試行量，正答率ともに平均値より下の者

結果と考察

Fig. 1 に事前テストにおける各群の全テストの平均点を示す。

Fig. 1 より，事前テストにおいて，全テストの平均点はV < I < II < III < IVの順で有意差は認められない (群：F (4, 525) = 1.93, P > .05, 認知スタイル：F (19, 476) = 1.33, P > .05)。よって，等質とする。

Fig. 2 に各テストにおける各群ごとの平均点を示す。

Fig. 2 より，後半に成績が伸びてきているのはIII群である。これは，問題の読み方は個人任せであるが，間違っただけをしっかりとらえることで，「もう同じミスはしない」「間違えないようじっくり取り組もう」という意識が働き，成績の上昇を見せたのであろう。何の構えも与えないIV群では，成績の上昇下降を繰り返している。I, II群の成績が落ち込んでいる場合が少なからずあるのは，問題によっては，新しく自分の中に構えを入れられない方が読みやすいことがある。例えば，

「すべて抜き出せ」という問題であれば，書き込みをさせる方が，かえ

って必要のない部分まで見つめてしまい，解答を間違ってしまうということがある。I群は，特に，良い成績を見せていない。じっくり読んで，これで間違いはないだろうと思う答案を書いてみても，間違っていることが多いため，間違っただけを理由を考える意味が薄くなってしまったものと思われる。事前テストと6回のテストの平均を比較してみると，上昇が多いのはII群，次いでIII群である。書き込みと間違っただけを理由，両方の構えを与えるよりもどちらか一方，どちらかといえば書き込みの方が有効である。よって，仮説①は支持されない。

認知スタイル別に，テスト平均点から4群を比較すると，「速くて正確型」のみに，I < II < III < IVの順で，5%水準で有意差が認められる (F (3, 35) = 2.86)。「速くて正確型」の

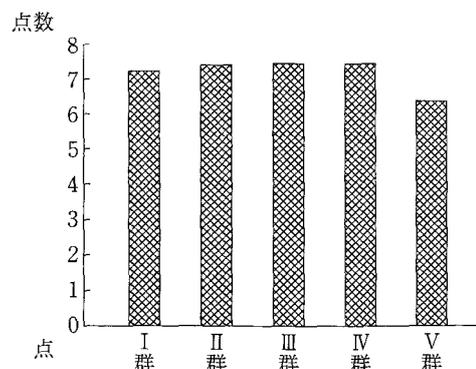


Fig. 1 事前テストにおける各群の全テストの平均点

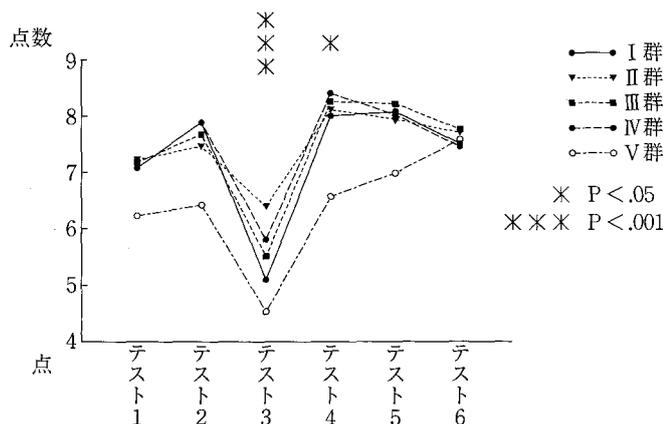


Fig. 2 各テストにおける各群ごとの平均点

者には、書き込みという作業は合わないのだろう。

Fig. 3～7に、各群におけるテストごとの認知スタイル別平均点を示す。

Fig. 3から、I群は、あまり良い成績を示していない。「速くて正確型」の成績がぐんと落ちている。

「速くて正確型」は、さっと読むだけでも内容をある程度把握できるのに、余分な構えを与えられて、自分のやり方と違ったために、うまく自分の能力を発揮できなかったのであろう。

Fig. 4より、II群も、書き込みという構えが自分の認知スタイルに適合しなかったのかどうか、「衝動型」には勝っているものの「速くて正確型」は良い成績を見せていない。

書き込みをして文章をじっくり読むことは、「熟慮型」や「遅くて不正確型」のゆっくり取り組むタイプには有効だが、「速くて正確型」や「衝動型」といった場合は、自分の認知スタイルとかけ離れているため、うまく構えの効果が出なかったのであろう。

Fig. 5より、「速くて正確型」が良い成績を示しているが、「遅くて不正確型」や「衝動型」との差があまりない。解答を間違えた理由を認識させることで、「衝動型」の者も少し落ち着いて問題に取り組んだために、ケアレスミスも減り、「衝動型」が少し上がったからだと思われる。有意差が出るほどの違いはなかった。

Fig. 6より、IV群は「衝動型」より「熟慮型」の方が良い成績を示している。「速くて正確型」が一番成績が良い。

Fig. 7より、どの認知スタイルの者も成績が上がったり下がったりしていて、一概に「速

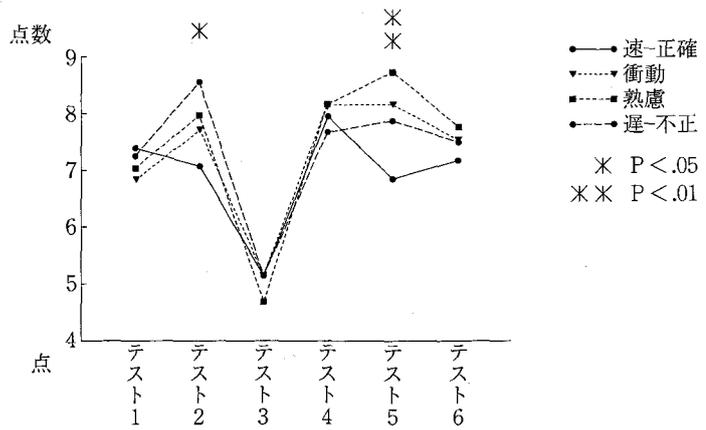


Fig. 3 I群におけるテストごとの認知スタイル別平均点

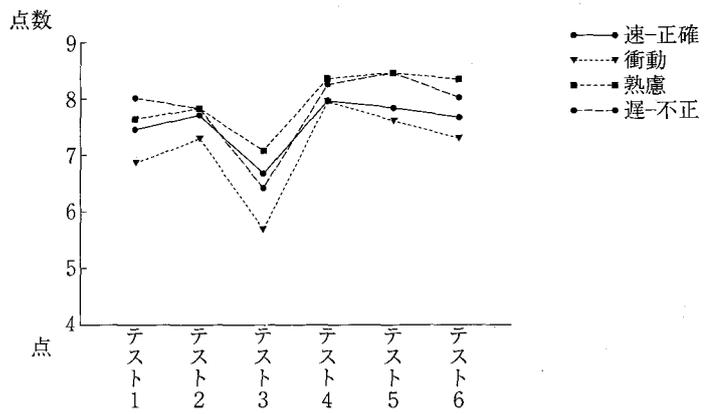


Fig. 4 II群におけるテストごとの認知スタイル別平均点

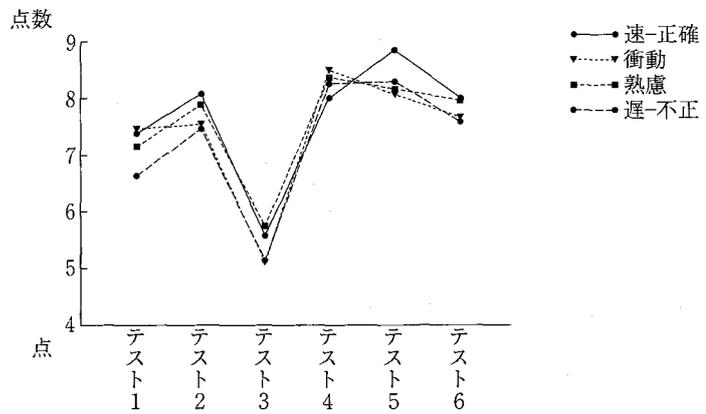


Fig. 5 III群におけるテストごとの認知スタイル別平均点

くて正確型」が良いともいえない。これは、全くのやりっぱなしで、自己採点も行なわなかったことから、今回のテストがほとんど無意味で役に立っていないということであろう。

以上から、仮説②は支持される。

国語や読解力に関する有意差をみるために、項目1：「好感度」、項目2：「読解力の必要度」、項目3：「読解時の熟読度」、の3つの項目を作る。それぞれ平均値を3とし、各項目の平均が3より大きい者を上位群、3以下の者を下位群とする。

項目1は「好感度」は、ほぼ全体的に上位群の方が良い成績を収めている。I、II群において有意差のみられる項目が多いが、III、IV群では有意差のみられるほどの違いはない。下位群の方は書き込み作業をしながらじっくり読むということに抵抗があり、うまく活用できなかったものと思われる。

項目2「読解力の必要度」は、どの群にも有意差が認められるほどの違いは出なかったものの、上位群の方が下位群よりわずかに良かった。

項目3「読解時の熟読度」も有意差は見られなかったが、おおよそ上位群の方が良かった。じっくり文法を追いながら文章を読む方が、読解に対しては効果的だといえる。

Fig. 8に各群における意識変化を示す。

Fig. 8より、有意差がみられるのは、アンケート23「自分の目標に近づくことができた」、24「真面目に取り組んだ」、26「復習をよくした」である。23番はIV、V群が低く、III群が一番高い。ただやらされるだけでは、自分の目標を持つこともなく、取り組む意欲も減退するということである。書き込みをせず、目標点のみに注目できたIII群が、1番「自分の目標に近付いた」と、目標の認

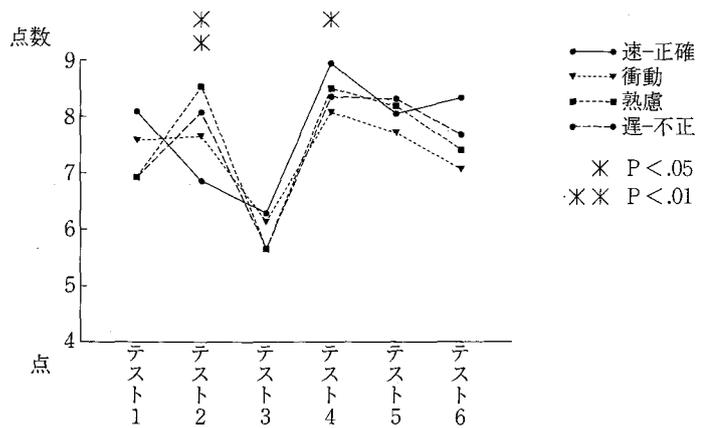


Fig. 6 IV群におけるテストごとの認知スタイル別平均点

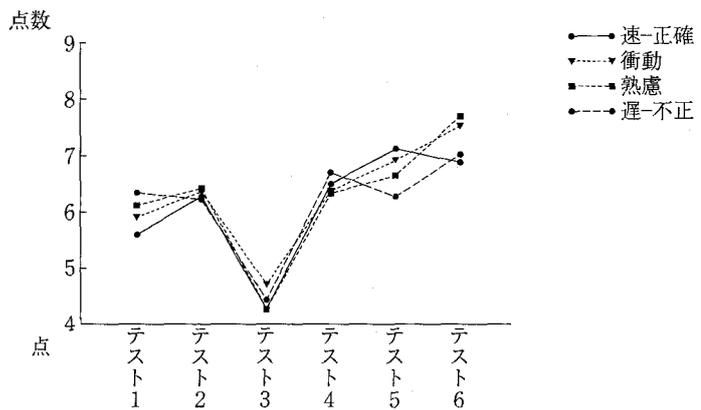


Fig. 7 V群におけるテストごとの認知スタイル別平均点

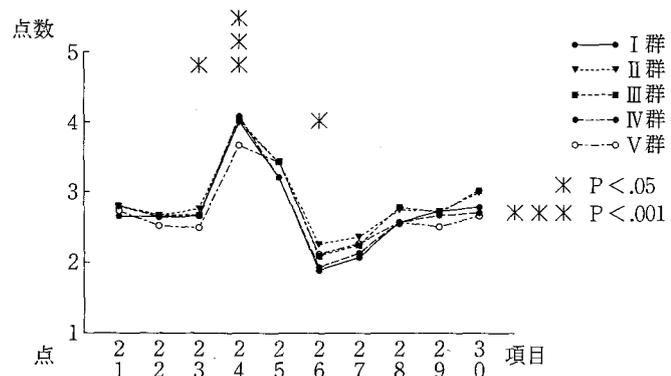


Fig. 8 各群における意識変化

識のしやすさも、目標達成感も高かったのであろう。24番は、I～IV群は大差ないが、V群が他の群と、かなりの違いをみせている。これは、自分が出した答えが正しいかの判定も下されず、ただやるだけで無意味だと、やる気も起こるはずもない、ということを示している。IV群のように、ただ解答するだけでも、自分のしたことに確信が持て、張りも出るということである。26番については、わずかにI、IV群が低い。I群は、文章を読むときも、解答する時もじっくり取り組むため、復習する必要性を感じなかったからであろう。IV群は目標自体もたっておらず、復習する内容もなかったのであろう。

以上から、仮説③は支持される。

結 論

一般的には、文章をじっくりと書き込みを加えながら読む方が、よいと考えられているが、本研究によって、認知スタイルの違い、また、他の構えの与え方によっては、書き込みをする読みの方が、成績が下がる場合もありうるが見い出された。

①書き込みと解答を間違った理由との両方の構えを与えるよりも、どちらか一方、どちらかといえば書き込みをさせる方が、文章の読解は深まる。また、書き込みをする読み方は、認知スタイルが「速くて正確型」、「衝動型」にとっては不利である。

②「衝動型」は、全体的に成績が悪い。文章を浅く、しかも間違った理解をすることが多いのであろう。そこで、与える構えとしては、「誤答の理由をしっかりと考える」が効果的である。

③国語、特に現代文の好きな者は、良い成績を収めており、好きな者の方がより好きになる。

参 考 文 献

- 北尾倫彦 1991 学習指導の心理学 有斐閣
佐藤公代 1985 思考の発達に関する研究—大学生の随筆読解と構えとの関係について— 愛媛大学教育学部
紀要 第I部 教育科学 第31巻 27-45
佐藤公代 1990 物語理解における構えの役割に関する研究 愛媛大学教育学部紀要第I部 教育科学 第36
巻 23-51
山崎 晃 1994 衝動型—熟慮型認知走査方略に関する研究 風間書房

付 記

データ整理や問題作成にかかりました風戸さやか氏と被験者の皆様にもいろいろお世話になりました。心より感謝致します。